

# 自然・社会・人格：芝田・南論争再考

高取憲一郎\*

Nature, Society, Personality : Reconsideration of Shibata-Minami Controversy

TAKATORI Kenichirou

キーワード：芝田・南論争，史的唯物論，ヴィゴツキー，ピアジェ，進化論的認識論

Key Words: Shibata-Minami controversy, historical materialism, Vygotsky, Piaget, evolutionary epistemology

## [ 1 ] はじめに

私が大学生のころ熱心に読んだ、芝田進午著『人間性と人格の理論』（青木書店、1961年）の中に、社会心理学の性格づけをめぐるの、芝田進午先生と南博先生との論争について、かなり詳しく触れている箇所があった。大学の2年生のころであるから、今から26年ぐらい前になるのだが、その論争のことが現在もなお、私の頭の片隅に残っている。最近、私は、心理学と史的唯物論の関連について興味を持っていて、それに関わる論文をいくつか著しているのであるが（たとえば、高取2005 a, 2005 b）、南先生が逝去された後、ようやく2004年12月に完結した南博セレクション全7巻（勁草書房、2001年～2004年）をながめていて、当時の芝田・南論争を再検討することは、私の最近の問題意識を発展させる上に役立つのではないかという思いを強く抱くことになった。

学生のころは、まだ2年生でもあったし、心理学も史的唯物論もまったく不勉強で、芝田先生の文章も不十分にしか理解できず、そのためにその当時は見落としていた重要な論点が、いくばくかの学修を経て、現在では新たな視点からながめることができるようになった。そこで、本稿では、芝田・南論争を、今日的視点から再検討し、さらに問題を発展させてみたい。

## [ 2 ] 問題

ここで取り上げようとしている芝田・南論争のそもそもの発端は、今はもう存在しない国となってしまったが、ソ連において1950年代に行われた科学的心理学とは何かをめぐる論争の総括論文である。それは『哲学の諸問題』誌の1954年4号に掲載された無署名論文「心理学の哲学的諸問題：討論の総括に寄せて」である。

---

\*鳥取大学地域学部地域教育学科

## 2-1 無署名論文「心理学の哲学的諸問題：討論の総括に寄せて」

この論文は、邦訳されて、『現代ソヴィエト哲学』(大月書店、1955年)の中に収められているようであるが、現在では入手できないので、芝田先生が紹介しているもの(芝田、1961.138頁)をさらに要約して記述しておく。

1) 人間の個別的意識の研究と社会的意識(階級意識・イデオロギー)の研究は区別すべきであり、心理学を社会学化してはならない。この第一の点を、私なりに表現すれば、心理学と史的唯物論は研究対象が異なることを明確にすべきであるということだと思われる。

2) 他方、心理現象を生理現象や神経現象と同一視する機械論的・行動主義的見解も支持できない。これは、行動主義的理解として、心理現象を神経・生理現象へと同一視するものとしている点でおかしいと思うが、私なりに解釈を加えれば、心理学におけるパロフの条件反射理論・高次神経活動の理論への過度の依存は間違いであるということを行っていると言っていると解される。

3) 同時に、心理現象を高次神経活動から切り離し、条件反射理論とは別の次元で構想する観念論的傾向も支持できない。これは、明らかに、フロイト理論やユング理論などの観念論的諸潮流には与し得ないということを行っている。

4) したがって、科学的心理学の確立は、条件反射理論に基づき、動物の高次神経活動から質的に区別される人間の心理の特質を研究することにより可能となる。この際に、人間の意識の研究は心理学に、社会的意識・イデオロギーの研究は史的唯物論に属することを明確にすることが必要であり、心理学は主として自然科学に属し、しかし、人格心理学のように社会科学に属する分野もある。

以上の、主張については、芝田は、いくつかの点に関しては妥当性を認めつつ、不明確な点として以下のような論点を指摘している。個人意識の研究は心理学、社会意識・イデオロギーの研究は史的唯物論と区別しているが、両者はいかに関係しているのか。心理学は自然科学であると主張しているが、人格心理学・人格理論といかなる関係にあるのか。

ところで、この時期に出版されて多くの読者に迎えられた、乾孝と高木正孝共著の『心理学』(青木書店、1957年)には、出版年から見ておそらくソ連の無署名論文を強く意識したであろう箇所がある。それは、心理学は社会科学か自然科学かという部分(第2章第4節)である。著者たちは、この問題に関しては、心理学は社会科学に属すると明言している。それは、心理学は社会的諸事象抜きには研究できないという理由からである。ただ、心理学は史的唯物論とは異なるということも明言している。この著書は、民科心理学部会の活動の一環として出版されたものであり、私の記憶に間違いがなければ、民科心理学部会には南も参加していたはずなので、乾、高木、南などは、ソ連の無署名論文を研究会などの場で共に検討していたこともありうる話である。

それでは次に、まず南論文が、以上紹介した無署名論文に対してどのような見解を対置しているのかということを見ていくことにしたい。

## 2-2 南博「社会心理学の性格と課題」論文(『思想』1956年4月号、後に南博『社会心理学の性格と課題』勁草書房1963年所収、以下の本論文中における引用はすべて勁草書房刊の著書によっている)

南は、ソ連の無署名論文が、心理学を生理学でもなく、社会学(史的唯物論)でもなく、しかし、自然科学であると規定した論理の混乱を指摘して、次のような主張を展開する。心理学は、自然科

学と社会科学の交差する地点に成立する科学であり、その中心になるのは個性(パーソナリティー)の研究である。すなわち、心理学は自然科学でもないし、社会科学でもない。両者の交流する地点に成立するということの特徴としている。その際の、交流する地点に成立するという意味は、「心理学は、人間という動物の一般的な心理過程の生理的土台を研究する生理心理学の部分と、社会的存在としての人間の個人的な個性と、社会集団のメンバーに共通な集団的な個性とをあつかう社会心理学の部分とに大きくわけることができる。ここで生理心理学は主として自然科学の部門に入り、社会心理学は主として社会科学の領分にぞくすると考えてよい。」(29頁)

南の主張は、要するに、自然科学と社会科学の両者の交流分野に心理学は成立するし、心理学は自然科学と社会科学の統合された科学であり、どちらか一方だけに属するものではないということだ。同論文の最後のあたりで、南は次のように述べる。「今後の課題は、自我を中心とする個性の構造と機能を、生理心理学的な要因と社会心理学的な要因とのむすびあう総合的な場として分析していくことである。」(38頁) 私なりに言い換えれば、心理学研究の中心となるのが個性(パーソナリティー)の研究であるということは、心理学の研究の中心には人格研究があるということである。

南の以上の考えは、その後書かれた論文においても首尾一貫しているのであるが、たとえば、1980年に刊行された『人間行動学』(岩波書店)においては、さらに深めた形で述べている。第 1 章の「人間行動学の提起」の部分では、行動を、生物の方向と社会の方向という双方向へ広げて考えて、その二つの方向の中心点に、人間の心、意識またはパーソナリティーを置いて、人間行動の一般理論あるいは人間行動学を構築するという論点を提起している。無署名論文が、心理学を自然科学と規定する一方で、いや生理学ではない、社会学でもない、パブロフの高次神経活動への過度の依存はダメだと、なにやらわけのわからないあいまいな態度をとっていることに対する批判でもあるのであろうが、南は行動を物質から社会行動までを含むものとしてとらえる。行動とは、物質過程 生体行動(生命 生理) 個体行動(心理 意識) 個人行動(パーソナリティー) 集団内行動 集団行動 社会行動という重層構造として捉えられるものである。無署名論文が批判したような、心理学を生理学に還元する立場とか、逆に心理学を社会学に還元する立場のような還元論を克服するためには、行動を生命から社会行動までの一貫した統一システムとしてとらえることが必要であると主張する。自然諸科学と社会諸科学とを統合して、人間を捉えることを目的とするのである。

南の行動学の構想は、行動を生命科学から社会科学までの総合的な視点から捉える雄大なアイデアであるが、『人間行動学』の章立てを見ても、そのことがよくわかる。ちなみに、第 1 章は、生体行動 [ 生命行動, 生理行動1(生体反射行動), 生理行動2(生体本能行動), 生体行動のモデル ], 第 2 章は個体行動 [ 個体反射と個体本能, 欲求と動機, 学習1(認知と記憶), 学習2(言語と思考), 感情と情動 ], 第 3 章は個人行動 [ 意識と無意識, 行動傾向と自我, パーソナリティ ], 第 4 章は集団行動 [ コミュニケーション, 集団の形成, 集団行動 ], 第 5 章は社会行動 [ 社会行動の体系, 生産行動の体系, 統合行動の体系, 文化行動の体系, 消費行動の体系, 変革行動の体系 ] となっている。ここから読み取れるように、南の行動の体系は、生物学から経済学・政治学までを含む広大な構想となっている。

さらに、南のもう一冊の行動に関する理論的著書である『行動理論史』(岩波書店、1976年)の組み立ても参照しておこう。この著書は、『人間行動学』よりも4年ほど早く刊行されたのであるが、その目次だけ並べてみても南の意図がよくうかがえるのである。すなわち、第1章は人間行動の自然史理論 [ 第1節 生物的人間の発見 1 進化主義の人間論：スペンサー、サムナー、ウォード 2 機能主義の心理学：ジェームズ、エンジェル、デューイ 第2節 生理心理的人間の追究 1 行

動主義の源泉 2 古典的行動主義：ワトソンをめぐって 第3節 心理社会的人間の解明 1 本能の心理学理論：ジェームズからマクドゥーガルへ 2 本能の社会理論：ウォラス，ヴェブレン，パレート]，第2章は人間行動の社会史理論[第1節 社会的人間の古典理論 1 市民社会の人間像：スミスとヘーゲル 2 社会革命の人間論：マルクス，エンゲルス 第2節 行動の社会学理論：ヴェーバー]，第3章は心理学の行動理論[第1節 操作主義 第2節 新行動主義とその周辺：ハル，トールマン，スキナー 第3節 社会行動主義の展開：ミードからモリスへ]，第4章は隣接諸科学の行動理論[第1節 行動生物学，行動遺伝学，生態学 第2節 人類学 第3節 社会学]，第5章は人間行動学の成立と展開[第1節 行動科学：人間行動学のアメリカ的形態 第2節 人間科学：人間行動学のヨーロッパ的形態 第3節 政策科学：行動学の社会主義的形態]，第6章は展望：行動としての意識，である。

全体的にまとめると、南の論点は、心理学の対象は意識および人格から成る個人行動，その中でもとりわけ人格（パーソナリティー）にある，という点である。そして，人格とは自然と社会の接点に成立するものである。ここで私見を述べておくと，以下の部分で人格という言葉が頻繁に出てくるのであるが，人格といっても漠然としていてわかりにくいので，人格の代わりに，人間形成と言い換えたほうがいいのではないかと思う。そうすると，南の表現を踏襲すれば，心理学は社会における意識の発生と社会における人間の形成について研究する科学であるということになる。

### 2-3 芝田進午『人間性と人格の理論』における南論文の批判点

芝田は，南の1956年の『思想』論文を次のように批判する。南は，ソ連の無署名論文の混乱を，心理学が二つの部分，すなわち，生理心理学と社会心理学から構成されるとすることによって解決しようとしただけであり，真の意味での解決の道を提案していない。芝田の述べるところを引用すると，「人間心理を『生理心理』と『社会心理』にわけ，また心理学を『生理心理学』と『社会心理学』の二つにわけて，しかるのち両者の『関係』について思いをめぐらすこれまでの『心理学』の方法自体が検討されねばならないのではなからうか。このような『心理学』は，人間性と人格について科学的に分析しているようにみえるが，実際は人間の心理現象を分裂的にとらえ，これに恣意的な二元論をもちこんでいるのではなからうか。」(140頁)

芝田は，南が生理心理学と社会心理学の統合として心理学を規定する立場を，人間を分裂的に捕らえる立場として批判するのである。私なりに，少し追加しておけば，南の立場は生理学と社会学との折衷論であると思う。さらに，このような折衷的視点は南のすべての論説に共通していることも指摘しておきたい。

南のその後の著書(『行動理論史』，『人間行動学』)には，この芝田の批判を意識したと思われる変更がなされている。それはすでに見たように，心理学を，芝田が批判したところの二元論として，すなわち，生理心理学と社会心理学の統合としてとらえるのではなくて，生命から社会行動までの行動の重層的システムとしての行動の体系の中に位置づける立場であり，自然科学か社会科学かという二元論ではなく，自然科学と社会科学の両者を含み，さらに，精神分析理論などの観念論・哲学等も含む広大な体系の一環として位置づける。行動とは，繰り返しになるのであるが，南によれば，物質過程から社会行動までの系列として考えられるものであり，心理的なるものは，しいて言えば，その中間点あたりに位置する個体行動(心理 意識)から個人行動(パーソナリティー)の部分が相当する。しかし，その心理的とみなされる部分でも，物質過程とつながっているし，社会行動ともつながっている。これが，南の見解であり，生理心理と社会心理の二元論を排して，いわば，

行動という概念によって生理と社会を一つにくくってしまい、一元論的にとらえるということである。

私は、この南の行動学は、たしかに、ソ連の無署名論文の難点を克服し、芝田の二元論批判に対する一つの解答にはなっていると思うのであるが、やはり、もともとの南の1956年の『思想』論文が抱えていた問題点、すなわち、芝田が生理心理学と社会心理学の折衷に過ぎないと批判した弱点を克服できていないのではないかと思う。私は、南は幅広い興味・関心と、それに対応した豊かな学識を備えた、日本の心理学の歴史の上でもまれに見る才能の持ち主であると評価しているのだが、彼の、行動学という概念は、見方を変えれば、物質科学から、生命科学、生理学、心理学、人類学、社会学、経済学、政治学、法律学などを寄せ集めて総合したものだともいえるのである。よって、芝田が1961年におこなった南批判は、その後の南の改訂にもかかわらず、生理心理学と社会心理学という二つの学問分野がいくつかの学問分野に変わっただけで、折衷的色彩はそのまま残っており、あいかわらず当てはまると思われる。

以上のことを踏まえたくて、芝田の見解を以下のように要約しておく。

芝田は、マルクスの「歴史自体が、自然史の、人間への自然の生成の、現実的な部分である。人間に関する科学が自然科学をそのもとに包括するように、自然科学はのちにまた人間に関する科学をそのもとに包括するであろう。すなわち、それは一つの科学となるであろう。」(マルクス『経済学・哲学手稿』)という一節を引用しながら、心理学は自然科学か社会科学かを論ずることがそもそも無意味であること、心理学は自然科学と社会科学の分裂を止揚して、一つの科学として成立するように志向するものであることを主張する。

また、無署名論文が、心理学は自然科学に、人格理論は史的唯物論に属するとした点に関しては、心理学と人格理論の統合の必要性を主張する。すなわち、心理と人格は切り離しがたい関係にあるので、心理学が真に科学的であるためには人格理論に媒介されねばならないし、心理学と人格理論は別の科学ではありえない。以上が芝田の主張である。

### [ 3 ] 今日の問題状況から芝田・南論争を考察する

芝田・南論争は、ソ連の1950年代の論文を発端として展開されたわけであるが、その後約50年を経た今日の状況において、かの論争を再検討しようとするときに、あくまでも私の手元にある情報の範囲内においてであるが、参考となる論文が二つある。一つは、エセル・トバクの「進化・遺伝学・心理学：ヴィゴツキー、ルリヤ、レオンチェフ再考」(Tobach,1999)であり、もう一つは、セス・チェイクリンの「文化・歴史心理学における人格の概念」(Chaiklin,2001a)である。この二つの論文はともに、セス・チェイクリンが編集した2冊の著書(Chaiklin et al.,1999, Chaiklin 2001b)に収められている。

トバク論文は、ヴィゴツキー、ルリヤ、レオンチェフたちの時代におけるソ連で、心理学の危機として取り上げられた問題と、現代のアメリカにおいて心理学の危機として意識されている問題は同一の問題であることを主張している。その問題とは、第一に、基礎心理学と応用心理学の間の矛盾である。基礎心理学は、実験室における研究に没頭して、その研究成果は、たとえば、医薬品業界などの産業に利用されている。いわば、金になる研究である。その一方では、人間の福祉と幸福を目指す応用心理学に従事する多数の臨床心理学者がいる。第二に、これは、ソ連の無署名論文に

顕著に現れていた、心理学は生理学か社会学か、あるいは、条件反射学か、史的唯物論か、という問題とも関連するのであるが、心理学を自然科学としてとらえるか、社会科学としてとらえるかという問題である。トバクによれば、現代のアメリカにおいては、この問題は、心理学を進化心理学としてとらえるか、あるいは、史的唯物論としてとらえるかという問題として焦点化される。この問題に関しては、トバク自身は、心理学は史的唯物論の立場から研究すべきであると考えていることを強調した上で、心理学者たるものは、進化心理学および遺伝学の最新の理論や研究成果に絶えず目配りをしておくことが必要であり、さらに、自らの職業と社会とのかかわりに常に関心を持ち、とくに、政治的活動に積極的に関わることが重要であると述べている。

次に、チェイクリン論文は、人格の概念は文化・歴史心理学の基本概念であることを確認したうえで、ヴィゴツキー、ルリヤ、レオンチェフたちもそれぞれ人格概念を検討してきていることを紹介している。その上で、文化・歴史心理学の中で人格概念が十分に理解されてきたかということ、そうではないと結論する。その理由は、具体的研究において人格概念が使用されてこなかったことによると考えている。私は、チェイクリンという研究者は、ヴィゴツキー学派の第三世代を代表する優れた人材であると考えているが(ここで注釈を加えておけば、私は、ヴィゴツキー、ルリヤ、レオンチェフたちの世代を第一世代、コール、ワーチ、ロゴフ、レイブ&ウェンガー、エンゲストローム、ファン・デル・フェールたちの世代を第二世代、そして、チェイクリン、モハメッド・エルハンモウミ、ロスたちの世代を第三世代と分類している)、そのチェイクリンでさえも、具体的なイメージとして人格概念を語りきれていない。南博が、1950年代の無署名論文に啓発されて、心理学が自然科学か社会科学かの論争に対するひとまずの答えとして、物質から意識への行動システムの一環としての人格概念を提起してからほぼ50年が経過したわけであるが、人格概念の具体化はヴィゴツキー派あるいは社会・文化心理学の流れのなかではほとんど進んでいないように思われる。

そこで、私自身が、この間、細々とではあるが、人格、すでに述べたように私は人格のことを社会における人間の形成と言い換えているのであるが、について検討してきた成果を振り返るかたちで、この欠けている部分を補ってみたい。ただ、私としては30年余の間、一貫して社会科学としての心理学を追究してきたので、社会における人間形成、すなわち人格概念に関してもそれを色濃く残した記述にならざるを得ない。

## [ 4 ] 私の視点から見た芝田・南論争以後の展開

### 4-1 乾孝の人格構造モデル

このモデルは、ソ連の無署名論文が問題にした、条件反射学に基礎を置きつつ、さらに社会科学にも基礎づけられたものとしての人格をとらえたモデルである。乾は、パブロフの条件反射理論と史的唯物論の立場をいかにして両立させるかという視点から、苦勞して以下のようなモデルを考案したものである。ただ、先に見たように、乾は高木との共著『心理学』のなかで、心理学は社会科学であると明言しているわけであるが、このモデルは無署名論文のはらむあいまいさの尻尾を引きづっているという側面と、南の言う自然科学(乾の場合は条件反射学)と社会科学の交流するところに成立する人格モデルという側面の二つの面を統合したものである。

乾の人格構造モデル(乾孝他, 1983)は、三層・三領域から成る。第一層は無条件反射(種属反

射)の層,第二層は第一信号系による個体反射の層,第三層は第二信号系による人格反射の層であり,これら三つの下部構造の上に,上部構造としての自我領域(オレ領域),人間関係(家族・仲間)領域,大社会(抽象的人間関係)領域の三つの領域から成る自我構造が存在するとする。

ごく単純に考えれば,第一層は,生物学的存在としての人間の側面を表現しており,第二層は,人間と外部世界のものとの関係,すなわち対象的活動の側面を表現し,第三層は,人間と人間の関係,すなわちコミュニケーションの側面を表現している。このように,乾モデルは,パブロフ条件反射学の影響をくっきりと残している点で,その当時のわが国の学問状況の歴史的な刻印を刻み込まれたモデルである。

#### 4-2 史的唯物論的視座と人格研究

以下に述べる人格モデルは,すべて,乾モデルとは異なって,パブロフ条件反射学の痕跡を完全に消し去った史的唯物論モデルであるという特徴をもつ。これらのモデルの根底にある基本的考え方は,人格を活動の側面と,コミュニケーションの側面の二つの軸からとらえると言うことであり,わが国では,この立場は,廣松渉(廣松渉,1971,1990)の史的唯物論解釈にもっともよく表れている。

廣松によれば史的唯物論の視座とは,人間の本質を究めるためには社会を解明しなければならないということであり,その際の社会の解剖学は経済学に,とりわけ,生産に求めなければならない。生産とは,第一に,対象的活動であり,第二に協働である。この第一と第二を含めた生産における協働態に基礎をおいてこそ唯物史観の基礎が設定される。すなわち,生産とは,協働として営まれる対象的活動であることとらえることが肝要であり,生産とは,人間の対自然ならびに相互間の一定の関わり合いであり,対自然の関係と相互間の関係とは不可分一体の編制であることとらえることが最も重要なポイントである。

ところで,以上のような廣松の視座は,無署名論文からしばらく経過した後のソビエト心理学においても現れていて,たとえば,ペトロフスキーとヤロシェフスキー編の『A concise psychological dictionary』(Petrovsky & Yaroshevsky, 1987)の人格(Personality)の項を見ると,「人格とは,対象志向的活動および社会的諸関係への参加を特徴づけるコミュニケーションの両方において,個人によって獲得されるシステムの質である」とされ,人格を活動とコミュニケーションの二つの軸からつくりあげられるものとしてとらえる立場がはっきりとみてとれる。

ここで,この観点をより詳しく説明するために,人格を活動とコミュニケーションとの二つの軸からとらえるという試みを二つあげておく。一つは,ソビエト心理学の中から,ヴィゴツキーの弟子である,エリコニンの人格の発達モデル,もう一つは,ヴィゴツキー心理学とピアジェ心理学の統合を図るチャプマンの認識の三項関係モデルである。

#### 4-3 エリコニンの発達段階図式

エリコニンの発達段階図式(El'konin, 1977)は,活動とコミュニケーションの二つの軸の上で人格の発達を考えるとときにもっともよく適合するモデルである。なぜなら,そのモデルは活動の系(エリコニンの言葉では,技術・操作的能力)と,コミュニケーションの系(エリコニンの言葉では欲求・動機的分野)の二つのグループが交互に優勢になることによって,人格の形成は進んでいくと考えているからである。3期6段階に区分された成長過程において,各段階ごとに一方の系が優勢となり,そのとき他方の系は潜在期として次の段階において優勢になるために備えている。そ

して、各段階には主導的活動と言われるものが想定されている。主導的活動とは、他の新しい種類の活動がその内部から分化されるような活動(たとえば、遊びの中から学習が生じる)、部分的な心理過程がその中で形成され、あるいは再編成されるような活動(たとえば、遊びの中で想像が形成される)、人格の基本的な変化にとってもっとも直接的に影響を与える活動、として特徴づけられるが、6段階に対応する6つの主導的活動が設定されている。( )内は、それらの主導的活動が、活動およびコミュニケーションのどちらの系に属するかを表している。

乳児段階：直接的な情動的接触(コミュニケーションの系)、幼児段階：対象の操作(活動の系)、就学前段階：役割遊び(コミュニケーションの系)、低学年段階：学習活動(活動の系)、青年前期：親密な人間関係(コミュニケーションの系)、青年後期：職業志向的活動(活動の系)である。

このエリコニンの発達段階図式は、ピアジェの発達段階図式が認識の系すなわち対象と主体の関係(活動)を重視した図式であり、またエリクソンの発達段階図式が、主体と主体の関係(コミュニケーション)を重視した図式であることを考えるとき、両者を統合した図式であると言える。

#### 4-4 チャップマンの認識の三項関係モデル

次にチャップマンの認識の三項関係モデルについて述べておく(Chapman,1991)。

彼の言う「認識の三項関係」とは、能動的主体、対話者、知識の対象、の3項の間を、と、との間については操作的相互作用、との間についてはコミュニケーション的相互作用で媒介させたモデルである。

ここで、チャップマンは「操作的」ということばと、「コミュニケーション的」ということばを次のように定義している。

「操作的」とは、もともとはラテン語の“operari”に由来しており、力を及ぼすとか影響する、あるいは何かを産み出す、あるいは何らかの仕事をするという意味である。主体と対象の間の操作的相互作用に見られる関係は、主体と対象の間の非対称的な関係である。というのは、両者のそれぞれの関わり方は、お互いに相補い合う関係にはあっても根本的に異なっているからである。主体は、その結果を頭に思い描いた上で対象に働きかける。その働きかけの結果、初めの予想と一致していれば、その時点で対象は認識されるわけだが、一致していなければ、次には修正された新たな予想をともなって再度働きかけがなされる。このようなプロセスが繰り返されていき、認識が深められていく。

次に、「コミュニケーション的」ということばの定義を見てみよう。チャップマンによれば、コミュニケーションするというのは、ラテン語の“communicare”から来ており、コミュニケーション的相互作用は主体と主体の間あるいは対話者の間の対称的な関係である。すなわち、コミュニケーション過程への参加者は、いずれもが交互に同一の能動的役割をとることが可能である。この点が、非対称的な関係である操作的相互作用とは異なる点である。さらに、コミュニケーション的相互作用には、感情と意図の共有がともなう。

さて、認識の三項関係をこのように定義した上で、次の段階が非常にユニークなのであるが、チャップマンはこの三項関係図式が7、8歳を境目にして全体としてまるごと内化されるとするのである。すなわち、ピアジェの知能の発達段階区分で言えば、前操作期から具体的操作期にかけての移行期において内化されるとするのである。この内化された操作的相互作用とコミュニケーション的相互作用が統合されることにより、人格が形成されていくのである。その意味では、エリコニンの言う、二つの系(活動とコミュニケーションの系)の統合による人格の形成と類似していると



も考えられる。

#### 4-5 ルビンシュテイン・アナニエフ・ロギノワの歴史のなかの人格

ルビンシュテインによれば(ルビンシュテイン, 1986), 人間は自己の歴史を持つかぎりにおいてのみ人格であり, 人生の歩みのなかで生ずるさまざまな出来事(事件)とは, その個人の生活の道程(人生)における結節点であり転機である。そのとき, どのような決定あるいは選択をするかにより, それから先の将来の生活の道程と生き方は方向づけられる。また, アナニエフによれば(アナニエフ, 1983), 人格は歴史的な感覚と体験によって特徴づけられる。すなわち, 歴史は人間の生活にとって不可欠のものであり, 人格は歴史的な時間抜きでは理解できない。そのとき, 出来事(事件)は人生の伝記の里程碑である。

以上のような, ルビンシュテインとアナニエフの問題提起を発展させたのは, ロギノワである(ロギノワ, 1978)。ロギノワによれば, 生活の道程とは人間の生活の歴史であり, 個人の発達の歴史である。個人は社会的諸関係の上で活動し, その個人の属する国の経済的・政治的状況, 文化の型と水準, 社会心理学的風土などの錯綜した状況により規定される生活様式に媒介されながら, 社会との関係を実現していく。そのような個人の生活の道程の本質を決定するものが, 社会および歴史と個人との接点に生ずる節としての出来事(事件)である。すなわち, 人格の発達方向や発達速度の変化と出来事(事件)とは密接に結びついている。そして, ロギノワは出来事(事件)を三種類に分類する。周囲の環境における出来事(事件), 個人の行動における出来事(事件), 個人の内面的生活における出来事(事件)である。そして, ロギノワは, 以上述べたような基本的立場から, 個人の伝記を分析することを通じて, さらにその中に生活記録的意味を読み取ることを通じて人格の形成を解明していこうとしているのである。

#### 4-6 フランスの女系三世代研究

フランスのプラデル・ドゥ・ラトゥール(Pradelles de Latour, 1987)は, 女系アイデンティティーの形成についての興味深いフィールド・ワークを報告している。

研究のフィールドは, ドイツ国境からフランス領内に数キロばかり入ったところに位置するバスサン・ウイエ・ロレーヌというある鉱山町である。バスサン・ウイエ・ロレーヌは, 政治的にはフランス領だが, 言語的にはゲルマン語起源のプラット語を母語とすることによって, フランスの外部にある。プラデル・ドゥ・ラトゥールがこの地を研究のフィールドに選んだ理由は, この地方に女系相続の習慣が残っているからだということである。

彼女のフィールド・ワークの内容は, この町に住むある一家族の祖母, 母, 娘の女系直系の三世代を対象にして, インタビューを通じてそれぞれの世代におけるアイデンティティーの継承と形成を調査したものである。三人の女性は, 祖母エレーヌ(1920年生れ, 調査当時66歳), その娘マリー・テレス(1943年生れ, 調査当時43歳), マリー・テレスの娘アン(1969年生れ, 調査当時17歳)である。三人とも, 鉱夫を父として生れた。

まず, エレーヌから見ていこう。彼女は, 農夫でありかつ鉱夫であった父親の長女として1920年に生れた。当時, 生家はいくつかの畑とヤギ数匹, 牛一頭, ブター頭を飼っていた。母語はプラット語であるが, 14歳まで通った学校でフランス語を習った。しかし, フランス語は弟ジャンとの間でしか使わなかった。19歳の時, ドイツ軍の侵攻によって村全体がヴィエンヌ県に避難した。ここでは生活条件はさらに悪くなり, 大きなショックを受けた。42年に鉱夫と結婚し妊娠する。しかし,

夫はその直後、ドイツ戦線へと送られる。皆が、彼は死んだものと思っていたところに、45年末になって、夫が帰ってきた。弟のジャンはソ連で戦死した。43年に娘(マリー・テレス)を出産し、その後三人の子供をなした。子供達は全員が村に残り、二人の娘はフランス人と結婚し、二人の息子は外国人と結婚した。エレーヌの夫は数年前に亡くなり、現在は未婚とその夫、二人の孫とともに住んでいる。

エレーヌの娘マリー・テレスは、1943年に生れた。幼少時のショッキングな記憶に父が突然帰ってきたということがある。家庭のなかではドイツ語の方言であるプラット語を話し、ドイツ語放送を聴き、ドイツ語雑誌を読んでいた。学校ではフランス語を学び、兄弟たちとはフランス語で話した。16歳で学校を終え、21歳で隣村の鉱夫と結婚するまで秘書として働いていた。やがて、祖父母と同居することになったが、その家は彼女が受け継ぐことになった。二人の子供(ピエールとアン)をもうけた。

マリー・テレスの娘アンは、1969年生れであり、新しい世代に属する。彼女は、女性も仕事を持つべきだと考えていて、現在の自分にとって仕事の問題はもっとも重要な問題だと思っている。母方の曾祖父母と同居しているので、プラット語はよく理解できるが、話すのは難しい。

ところで、三人の女性とのインタビューの中で、彼女たちが言及した親類、縁者の構成を見ると非常に注目すべき傾向が見られたという。エレーヌはインタビューの中で、7世代33人の人々に言及し、マリー・テレスは6世代22人、アンは4世代19人に言及している。彼女たちのすべてにおいて、母系のネットワークが重要な位置を占めている。たとえばエレーヌの場合を見てみると、母方の親類には4世代12人にわたって触れているのに対して、父方については父の妹たちのみである。また、その関係は親類の呼び方にも現われていて、伯母のことを「母方の祖母の姉の娘」(エレーヌ)、いとこのことを「祖母の一番下の息子の娘」(アン)などと、母方の系列の場合には長い表現で表しているのに対して、父方の場合は、曾祖父のことを「私の祖父、彼の父(マリー・テレス)、祖父のことを「私の父、彼の父」(アン)と述べている。このことから、彼女たちにとっては父系と母系の意味空間が異なることがわかる。

ところで、プラデル・ドゥ・ラトゥールの説明によれば、アイデンティティーには、大きく分けて二つあるという。一つは、父系のアイデンティティーで、それは家名のアイデンティティーでもあり、国家のアイデンティティーでもある。他の一つは母系のアイデンティティーで、それは財産(住居、菜園、墓)の伝達と緊密に結びついた地域のアイデンティティーである。ここで少し付け加えておけば、母あるいは祖母の財産を受け継いだ娘は、母や祖母が死ぬまで面倒を見なくてはならないということである。さらに、彼女によれば、この二つのアイデンティティーの間の違いは、男たちは通りすぎていき、やがて名誉の戦死を遂げるだけだが、女たちはそこにとどまり、家と土地と墓を次の世代へと伝えていくということになる。女たちは、まるで深層海流のように女系のラインの上を着実に次の世代へと自らの生命と生活を伝承していくが、男は表層の流れに乗って、現われては虚しく消えていくということであろうか。

このような女たちのアイデンティティー形成に不可欠の要素として、プラデル・ドゥ・ラトゥールは二つが重要であると言う。一つは、母への同一化であるイメージ的同一化であり、これは目を媒介にしている。たとえば、母の料理の仕方、菜園の耕し方、果物や野菜の保存法、墓の守り方、出産や結婚や葬式などで母がどのようにふるまったかなどを見ることによって、娘は母のやり方を身につけていく。他の一つは、孫娘と祖母との間で行なわれる同一化であり、祖母の語るさまざまな物語を聞くことによって生じる同一化、すなわち耳を媒介にしておこなわれるシンボリック同一化

である。プラデル・ドゥ・ラトゥールは、この祖母から孫娘へと伝えられる物語は非常に重要であると指摘している。祖母の物語の内容は、祖母の送ってきた人生や、若い頃の周囲の人々のこと、また家族のさまざまなメンバーについてなどであるが、これは家族小説の横系の役目を果たしているという。すなわち、それらの物語を通じて、孫娘は自分を過去の家族の人々と結びつけ、自分を歴史的時間のなかに位置づけることが可能になる。またそれは、孫娘が自分を未来のなかに位置づけることも可能にする。さらに、前の世代の女性たちの行動を語る祖母の物語は、現に今、この家族のなかで母がおこなっていることは、前の世代から引き継がれた正当性にのっとなって母がそのようにふるまっているのだということを保証する役割をも持つことになり、たいへん重要であるというわけである。

さて、この二つ目のシンボリック同一化については、別の論文(Pradelles de Latour, 1990)でもその意義を強調している。すなわち、男と女をセックスとしてではなくジェンダーとして見ると、彼女の言葉を引用すれば、「人間は男あるいは女として生まれるのではなく、男あるいは女になるのだ。男あるいは女として自らを分類する、すなわち、男あるいは女という言葉で自認するのに必要なのは、男あるいは女の生物学的性(セックス)を伴って生まれるというだけでは不十分である。決定的に重要なのは言語活動(langage)である。すなわち、人間が男あるいは女としてシンボリックに形成されるのは、言語活動を通じてである。」そのために、シンボリック同一化が重視されるのである。

もう一つ注目すべき点は、プラデル・ドゥ・ラトゥールが女たちの営々とくりかえされる日々の営み、たとえば食物の準備、菜園の耕作、果物や野菜の保存、墓の維持と管理、家庭内行事(冠婚葬祭、誕生、聖体拝領など)の管理などを「わざ」(savoir-faire)としてとらえている点である。そして、このような「わざ」は、住民の身にいかなる経済的、政治的な大変化がふりかかっても、女たちから女たちへと、世代から次の世代へとほとんど変化することなく伝えられていくとされる。たとえ男たちが、戦争のたびごとに徴兵され捕虜になり、あるいは異境で死ぬようなことがあっても、後に残された女たちから女たちへと連綿と受け継がれていくのである。

このように、女性を大地に根ざしたたくましい存在としてとらえる立場は、バフチンが女性を民衆の笑いあるいはグロテスク・リアリズムを象徴しているものとみなしているという見解に一致する(バフチン, 1973)。バフチンによれば、女性は肉体的下層と結びつくと同時に生殖原理も司るという点において、両義的であり、格下げすると同時に再生させるという両面価値を備えているのであるが、そこに女性の持つ強靭さが存在するからである。

ところで、このような、女性を宇宙論的な視点から見て男性よりも意味ある存在とする見解は、文化人類学者に共通なものである。たとえば、山口昌男は女性は全体性、多義性を有するがゆえに男性よりもはるかに宇宙論的凝縮度の高い存在であり、そのために、女性は同時代の男性中心の客観文化からの「はみ出し」の部分を含む。この「はみ出し」の部分の豊饒性が文化のうちの深い隠れた部分にほかならぬと言う。すなわち、女性が文化の深層を担っていることを指摘するのである(山口昌男, 1990)。

また、日本の民俗学研究者もプラデル・ドゥ・ラトゥールのシンボリック同一化と同様のことを指摘していて、文化貫通的な女性の持つ特性としての心理の古層という興味深いテーマが浮かび上がってくる。たとえば、柳田国男によれば(柳田国男, 1983)、女の子が10歳から13歳の精神が微妙に動く年頃に、祖母が昔話をして聞かせることは、孫娘の優しさとか情操の教育になっていたということであるし、また、大林太良によれば(大林太良, 1984)、そのような昔話は聖なる空間で

ある囲炉裏端で、家系伝承を中心に行なわれ、女性が重要な役割を果たしたという。

以上のことから、ブラデル・ドゥ・ラトゥールが扱った題材は、わが国も含めた全人類共通の文化の深層に関わることがらであったことがわかるのである。ブラデル・ドゥ・ラトゥールは、父系と母系の二つのアイデンティティーの相違について、男たちは通りすぎていき、やがて名誉の戦死を遂げるだけだが、女たちはそこにとどまり、家と土地と墓を次の世代へと伝えていくと表現しているが、この描写は女性の持つ根源的な力と文化の深層を担うたくましさを表すものであり、私に強い印象を残した。

#### 4-7 ルリヤの言語・社会的活動と人格

言語学者大久保忠利は、ソビエト心理学の基本的な考え方は、人間の心理や人格は言語に媒介されて成り立つという見解であるとして、あらゆる心理過程および人格の基礎に言語があるということを中心を主張している。さらに、人間の心理や人格における言語のもつ重要な役割を主張した点にこそ、ソビエト心理学の画期的な貢献があったと指摘している(大久保忠利, 1980, 1981)。もっとも、ここで大久保がソビエト心理学の基本的な考え方としているのは、決してソビエト心理学全般に当てはまるのではなく、あくまでもヴィゴツキー心理学、とりわけその弟子のルリヤに当てはまる見解であることは注意しておかななくてはならない。

この大久保の見解をもとにして、ヴィゴツキー理論をながめると、たしかに、言語を基礎にしてあらゆる心理過程が叙述されているということがよくわかるのだが、そのことを最もよく表している著書としては、ルリヤの『ルリヤ現代の心理学(上・下)』(ルリヤ, 1980)がある。そのなかで、ルリヤは、人間が言語を獲得することによって、心理過程に変革がもたらされたことを強調している。その変革は、人間の意識を動物段階の意識とは飛躍的に異なった水準へもたらすと考える。たとえば、知覚は言語に媒介されることによって、外部世界のより本質的で一般的な特徴を抽出できるようになり、その他、注意・記憶・情動などの過程も言語をもつことによって、動物段階のそれとは質的に異なる特徴をもつことになる。

ところで、話は少し飛躍するが、ハンガリーの音楽教育メソッドであるコダーイ・メソッドは、その考え方においてヴィゴツキー心理学ときわめて類似している。それはどういうことかということ、コダーイ・メソッドは、すべての心理過程と人格の基礎に音楽があることを主張するからである。いわく、音楽は情動と知能の発達を促進し、また想像力、抽象的思考能力の発達を促進する。さらに、音楽を媒介とした集団遊戯やゲームをおこなうなかで、先生と生徒、生徒と生徒との間に新しい人間関係が生まれ、また個々の生徒は集団における自分の役割を自覚する。全体として、音楽は子どもの人格の発達に重大な影響を与える(Forrai, 1988)。

さて、意識と人格の基礎に言語を置く、ヴィゴツキー・ルリヤの見解を最もよく表している研究成果の一つに、ヴィゴツキーやルリヤたちが1930年代初頭に中央アジアでおこなったフィールド調査(ルリヤ, 1976)がある。

彼らの調査は、1931年から32年にかけてウズベキスタンおよびキルギスでおこなわれた。その当時、これらの地域では、ロシア革命の直後ということもあって、社会・経済制度および生活の文化水準において根本的な変革が生じていた。すなわち、それまでの天然綿栽培を中心とした農業(ウズベキスタン)や牧畜(キルギス)から、集団農業が主で一部に工業の発展しつつあるという共和国への変貌であり、文化水準の面でも、かつての住民の大半が文盲であり、イスラム教の顕著な影響下にあるという状況から、頻りに文盲撲滅講習会が催され、広範な学校施設が着々と整備されると

いう段階への変革であった。

このような劇的な社会の変革のなかで、心理諸過程がどのように変化していくのかというのが彼らの研究テーマであった。とりわけ注目されたのは、文盲撲滅運動を中心とする言語教育システムの発展にともない、読み書き能力を習得すること、および集団的な生産形態に参加することが、心理過程にどのような影響をもたらすのかという点であった。ルリヤたちは、それらの獲得水準の異なる農夫や牧夫、家庭婦人、学生、コルホーズ活動家などを対象にして、インタビュー法を用いて、彼らの知覚、抽象と一般化、推論と結論、判断と課題解決、想像、自己分析と自己意識などを調査した。

その結果は、獲得された言語体系の水準と集団参加の程度が上昇するのにもなっており、心理諸過程における基本的特徴が、直観 - 行為的現実反映という形式から、抽象的 - 論理的現実反映という形式へと変化していくことが明らかになった。

また自己意識の側面に関しても、三つの発展段階があることが示された。この自己意識のインタビュー調査は、被験者に対して、自分自身をどのように評価するか、他人と自分はどこが異なっているのか、自分自身のどのような長所や短所に気づいているのか、などの質問を課することから構成されている。

まず第一段階は、自分の性格の長所や短所を述べることを拒むか、あるいは問題を自分たちの生活の具体的、物質的事実の記述（たとえば衣服や住居の欠乏など）にすりかえてしまった。

第二段階前半は、集団的労働に参加して他人の行動を観察し、そして自己の行動も他人により評価されることによって、自己分析のしかたが他人の言葉による自己の外的行動の記述へと移る。第二段階後半は、前半の特徴がますます強まり、集団の社会的行動規範とそれに基づく理想的自己像とを比較して自分の特質を評価するという特徴が見られるようになる。しかし、この段階でも内面的特質の記述よりも行動や日常生活場面の記述のほうが優勢である。

第三段階では、自分自身の内面的な心理学的特質の分析が、容易におこなわれるようになる。

以上のように、自己意識の変遷は、初めは外的属性に基づいた物的叙述が主であったものが、次第に自己の外的行動の叙述へと変化し、最終的には自己の内面的な心理学的特質の叙述へと進んでいく。その間に、集団的労働への参加にともなう、自分と他者との比較とか、集団的規範との比較という過程を含んでいる。

このように自己意識が変化していくという見解は、マルクスが、『資本論』のなかで自己意識の発生について述べた部分を思い出させる。すなわち、自己意識というものは、他人の存在というものを前提にして初めて成立する。言い換えると、他人との相互交渉の過程を経て、つまり他人というものを一度通過し、他人をくぐりぬけた後で初めて自己を見出し、自己という領域が確立されるという立場である。マルクスの該当箇所を引用すれば、「見方によっては、人間も商品と同じである。人間は、鏡をもってこの世に生まれてくるのでもなければ、私は私である、というフィヒテ流の哲学者として生まれてくるのでもないから、はじめはまず他の人間に自分自身を映してみる。人間ペーターは、彼と等しいものとしての人間パウルとの関連を通してはじめて人間としての自分自身に関連する。だが、それとともに、ペーターにとってはパウルの全体が、そのパウルの肉体的ままで、人間という種属の現象形態として通用する。」（マルクス『資本論』新日本出版社版、第1巻、第1分冊、90-91頁）。ここでは、自己意識のあり方のなかに社会における人間形成の状態がよく反映しているという意味で、自己意識研究が人格形成の研究とみなされるのである。

以上に紹介したルリヤたちのフィールドワークを中心とした興味深い調査研究は、なぜかその後

ソ連ではおこなわれなかったが、近年のヴィゴツキーの復権とともにいくつか同様の試みが見られるようになった。そのうちの一つであるカリモワの論文「ウズベキスタン女性の人格の新しい社会的・心理的質の形成過程」(カリモワ, 1987)を紹介しておこう。

よく知られているように、イスラム文化圏の女性の社会的地位は現在でもきわめて低いとされている。カリモワは、そのようなイスラム文化圏の一つであるウズベキスタンにおける社会的変革にともなう女性の人格の変容を、ロシア革命の前後の小説とか詩などの文献も利用しながら検討している。カリモワによれば、ウズベキスタンの女性は革命の前後を問わず、一般的に次のような心理的特性を備えているという。すなわち、勤勉・献身的・正直・子供好き・思慮深さ・人道的・誠実・礼節・謙虚などである。とくに、勤勉さはきわだっており、家事はもちろんのこと子育てや老親や夫の世話をし、さらに繭の生産や乳製品の製造などの農業生産へも一家の中心として関わっていたという。

さて、カリモワによれば、革命前の文献記録を整理すると、当時のウズベキスタン女性の人格特徴は、依存的・非社会的・無口・臆病・気がきかない・迷信深い・だまされやすい・自信がない・受動的・優柔不断・非自立的などであり、当時の女性の置かれていた生活様式に影響されてきわめて否定的な人格特性を持っていたことが明らかである。

ところが、革命後の急激な社会的変革のなかで、女性たちは女性専用の居室であるイチカリをとり出し、ベールを脱ぎ捨て、集団農業に参加し、婦人クラブに加盟し、文盲一掃学校に通い、読み書きを学んだ。このような新たな社会的関係のなかに入りこむことにより、彼女たちは互いの思想を交換し、新たな人間関係を体験し、そのことにより新たな興味や動機を呼び起こされていく中で、人格の社会的豊かさを発展させていった。その結果として、現代のウズベキスタン女性の人格特性は、労働に対する意識的で創造的な関係・楽観主義・利発さ・社交性・協調性・自立心・決断力・目的性・進取の精神・責任感などによって特徴づけられるという。

ところで、ヴィゴツキー・ルリヤたちの中央アジア調査に関連して、エストニアのピーター・トゥルビステが、説明概念としての活動について論じているのでここで取り上げておく。

トゥルビステは「文化心理学における説明概念としての活動」という論文(Tulviste, 1999)の中で、ルリヤの中央アジア調査の結果は、レオンチェフの活動概念(レオンチェフ, 1980)によって最もよく説明がつくと主張している。ルリヤの調査結果というのは、人間の意識は、もっともこの場合は、知覚・思考・想像・判断・自己意識を指しているのであるが、能動的な生活過程、換言すれば、能動的な活動過程により決定されることを示した点にある。ルリヤはこの生活過程あるいは活動過程は、道具のシステム(労働)、事物のシステム(文化)、社会関係のシステム(活動の集団的形態)、言語のシステム(教育)から構成されると考えているが、実際の説明に用いているのは、その中の言語のシステムと社会関係のシステムである。具体的には、言語教育の水準の高低、社会的活動の形態(集団的か孤立的か)と、意識の水準(抽象的・範疇的意識か具体的・場面的意識か)が関連していることを実証した。

これが、レオンチェフの見解に一致している理由は、レオンチェフによれば、心は人間の周囲からの刺激により決定されるのではなく、社会的存在条件により決定されると考えるからである。この場合の社会的存在条件というのは、人間の現実的な生活過程のことである。また、人間の現実的な生活過程とは、生産における活動の総体であり活動のシステムである(レオンチェフ, 1980, 68頁参照)。そして、この活動の中で、物質は意識へと変換される(76頁)。

さて、トゥルビステは、アメリカのネオ・ヴィゴツキー派の研究者たち、コール・スクリプナー、

サクスなどは、活動を単に文脈という意味で使用していて、レオンチェフが定義していたように活動を使用していないと批判している。さらに、意識は、どのような活動をしているかということによって、あるいはどのような言語的意味システムを使用しているのかによって決定されると考えている。さらにトゥルビステは、活動の種類と意味の種類をあわせて文化のタイプと定義して、意識は文化のタイプによって決定されると考える。意識は、自然によってではなく、文化によって決定される。これが文化心理学だというわけだ。

さらに、ワーチとの共著論文「ヴィゴツキーと今日の発達心理学」(Wertsch&Tulviste,1996)の中では、このような立場をサピア・ウオーフの言語相対性仮説になぞらえて、活動相対性仮説と呼んでいる。すなわち、活動の種類が異なれば意識の種類も異なるというわけである。

#### 4-8 ヴァシリユックの創造主体としての人格

次にとり上げるヴァシリユックの「体験の心理学」(Vasilyuk, 1991)は対象的活動を主体内部の活動にまで拡張している点で異色である。

ヴァシリユックによれば、体験(experiencing)とは、人生において遭遇する深い存在論的な危機を克服して生きることであり、一時的に失われていた精神的均衡を回復するような特殊な内的な活動である。この体験と呼ばれる内的活動が、一般的な対象的活動と異なる点は、外部のものに働きかけて何かある物質を生産するということではなくて、精神的均衡、新たな意味、精神の静寂、新たな価値観などの非物質的で、意識内容に関わるような、内的で主観的ななにかを生産するという点である。従来のソ連のマルクス主義の基本的見解では、ある人が人生の存在の危機に関わるような事件とか問題に遭遇した場合は、その人をとりまく状況あるいは社会的制度を変革していくことこそが問題を根本的に解決する道であるとみなしてきたというのが一般的であったように思う。ところが、ヴァシリユックの見解に従えば、状況を変革するのではなく、社会的・文化的道具(たとえば宗教)を媒介にしてという条件つきではあるが、自らの内部世界の意味付けを再構造化することによって危機の乗り越えを実現するということが中心となる。

ヴァシリユックは、彼の図式を説明するためにドストエフスキーの『罪と罰』のラスコリニコフの例を引用している。それによれば、ラスコリニコフが危機的状況を克服して最終的に人格の統合を回復できたのは、彼にとっては新しい価値体系(すなわち宗教)を体現しているソーニャによって導かれたためである。この場合、ソーニャはラスコリニコフにとっては意味のある他者であり、媒介としての他者であった。そのソーニャに媒介されて、ラスコリニコフは宗教という社会的・文化的道具を与えられて、自らを新たな社会的文脈の中へと位置づけることによって立直ったのである。

このようなヴァシリユックの立場は、コースリンによれば(Kozulin, 1990)「自ら人生を創造する視座」(life as authoring approach)ということになるが、要するに、人間というものは社会によって一方的に決定される存在ではなく、自ら能動的に人生の苦難に耐えて、自己の内的世界を再構造化し、自己の進路を切り開くような存在でもあるということであろう。それは、ちょうど、芸術家や思想家が創造の過程において新しいものを生み出すプロセスに類似しているという意味での創造(authoring)なのである。

このような、従来のソ連におけるマルクス主義解釈とは肌合を異にする見解が、ちょうどソ連・東欧の崩壊と軌を一にして登場してきたのは、当然といえば当然でもあるが、上に引用したコースリンは、このようなヴァシリユックの新しい立場の登場によってソビエト心理学は新たな可能性を

獲得し、真の意味でのヒューマンスティック心理学へと発展していく道を見出したとするのである。

#### 4-9 リュシアン・セーブの時間使用のトポロギーとしての人格構造モデル

史的唯物論と心理学の関連を論ずるときに、フランスのリュシアン・セーブの人格理論(セーブ, 1978)は見逃すことはできない。

セーブは、資本主義社会における人間の活動を抽象的活動と具体的活動、活動の部門と部門の四種類より成るものとしてとらえる。ここで、抽象的活動というのは、資本主義社会における生産的ではあるが疎外された社会的活動であり、具体的活動というのは直接的な個人的諸活動、とりわけ消費活動である。また、活動の部門というのは、学習活動であり、部門というのはなんらかの生産活動である。これらを組合せると、四つのセクターから構成される資本主義的諸関係内部における人格の下部構造の図式ができあがる。

このとき、部門の具体的活動は、具体的活動のなかで発揮される力能(capacités)を形成し発達させるような学習の総体である。たとえば、日常生活に必要な基本的な読み、書き、計算などの技能の学習がこれに当たる。部門の具体的活動は、直接的に個人に返ってくるような力能発揮の所作(actes)の総体である。たとえば、個人的消費活動、レジャー活動、家庭内での仕事などがこれにあたる。部門の抽象的活動は、社会的労働およびそこに組み込まれている社会的諸関係が要求する力能を形成し発達させるような学習と訓練の総体である。たとえば、職業に就くための中学・高校・大学・専門学校などにおける学習である。部門の抽象的活動は、社会的労働を直接成り立たせるような所作の総体である。要するに、労働者のおこなう労働である。

セーブは、以上の四つのセクターにどの位の割合で時間が配分されるか(時間使用のトポロギー)によって、資本主義的諸関係内部での人格の下部構造が決定されると考える。そして、たとえば学童、学生、労働者、老人の下部構造がそれぞれ表されるとする。

このセーブの人格構造のトポロギーは非常に魅力的なものであり、彼も指摘するように、これまで心理学がほとんど研究してこなかった人生の段階の問題、心理学的成長法則の問題に光を当てたという功績がある。しかし、このセーブの主張をレナードは次のように批判する(レナード, 1988)。すなわち、セーブの立場は経済的生産至上主義であり、家族関係とりわけ家事労働に対する認識が欠けている。たとえば、女性の毎日おこなっている食事の準備、育児、あるいは老親の世話、夫の世話などは、どこにも入りようがない。すなわち、男性の人生の段階、男性の心理学的成長法則の段階図にはなりえても、女性の段階図にはなりえない。

しかし、私は、このようなフェミニズム的観点の欠如という問題は、セーブにのみ見られる欠陥ではなくて、これまで紹介してきた史的唯物論的見解すべてに欠けている視点だと思っている。この、フェミニズム的視点の問題については、後に触れることになるであろう。

#### 4-10 ハンガリー歴史心理学における人格と民族的アイデンティティー

私は1988年9月から1989年の8月までの一年間、ハンガリーの首都ブダペストのハンガリー科学アカデミー心理学研究所社会心理学部門に滞在した。心理学研究所の当時の所長であったパタキは、ソ連のペレストロイカの動きのなかで、ハンガリーの国民の状況について注目すべき論文を発表していた。

パタキの「認識構造としてのアイデンティティー・モデル」(パタキ, 1986)は、20答法を用いて、ハンガリーの高校生・大学生・青年労働者・企業の幹部の人格特徴を分析したものである。そ



の結果から明らかになったことは、ハンガリーの青年たち（学生も労働者も）が背社会的志向と私生活志向を示しているのだが、これは、社会的労働体験の欠如ないし不足に由来することを指摘している。さらに、その論文の中でパタキは、20答法によって心理学的レベルにおける人格構造の析出はできても、現実の社会に生活している人間の人格研究としては不十分であるとして、日記分析による人格研究を提唱している。その具体化としては、ハンガリーの代表的知識人の一人であるバラージュ・ペーラが、ユダヤ人として生きるかハンガリー人として生きるかという民族的アイデンティティーの問題を、二つの世界大戦を通じて激動するハンガリーの政治・経済・社会の変化との関わりで、また、コダーイやパルトークという友人との交流と関連させながら、その日記を分析することにより追求していこうとしていた。

パタキには、この他に、「逸脱行動のいくつかの問題」(パタキ, 1987) という注目すべき論文がある。その中で、彼は当時はまだ社会主義国であったハンガリーにおいて、さまざまな逸脱行動(非行, 自殺, 売春, 麻薬など)が急増していることを明らかにし、それまで公式的見解としては社会主義社会にはそのような行動は少ないとか、資本主義社会と異なり社会主義社会ではそのような行動は起るはずはないというような楽観的社会主義美化論に対して、鋭く警告した。彼は、従来の人格の一元的社会決定論ともいうべき公式見解に公然と異を唱え、このような逸脱行動を検討する際には、社会的要因は重要であるが、人格的・主体的要因もそれに劣らず重要であることを強調した。

これらのパタキの論文はペレストロイカの波に乗って登場してきたものであるが、その後のソ連・東欧の大変革を予兆した記念すべき論文であったと思う。

さて、私が1年間滞在したハンガリー科学アカデミー心理学研究所にはいくつかの部門があったが、その一つに人格心理学部門があった。当時の部門主任をしていたのがエルシュであった。彼の専門はフロイト・マルクス問題の歴史心理学であるが、彼によれば、フロイト・マルクス問題はまさに東欧・中欧の社会史の産物である。というのは、この地域においては数多くの歴史的大変動(革命・反革命・戦争・ファシスト支配・スターリニスト支配など)によって、個人の存在と地位がいくたびか破壊されてきたからである。彼が、1982年以来おこなってきた戦後ハンガリーにおけるユダヤ人アイデンティティー問題は、このような彼の問題意識の文脈上に位置づけられるものである。

私がハンガリーに滞在していたころは、ハンガリーには8万人から10万人のユダヤ人が住んでいて、ソ連以外の東・中欧では最大のユダヤ人人口を擁しているといわれていた。もっとも、両大戦期の混乱のなかで、ユダヤ人に対する迫害を避けて、多数のハンガリー系ユダヤ人が国外へ移住し、そのためにハンガリーの科学や芸術の分野は人的に大きな打撃を受けたこと、また、アウシュビッツをはじめとする強制収容所でハンガリー系ユダヤ人50万人が命を落としたことも忘れてはならない事実である。

このような歴史をもつハンガリーであるが、ユダヤ人に対する偏見・差別はその当時でも厳然と存在していた。その原因としては、言語、文化、歴史、伝統、民族的性格などの異質性に対する反感、当時のハンガリーの指導層、富裕層にユダヤ系が多いことに対するねたみ、ユダヤ人セクト主義に対する警戒感、いくつかの現代史の諸事件(第二次大戦中のユダヤ人虐殺、社会主義革命、56年問題、中東問題など)を通しての反ユダヤ感情とその裏返しとしての罪悪感などがあげられよう。

以上のような社会的・歴史的状況のなかで、現在のハンガリーのユダヤ人も、なにか大きな歴史的出来事とか事件が発生するたびに、自己の生存の不安とか迫害の再来の不安にさいなまれてきたわけである。このような中で、ハンガリーのユダヤ人は、ハンガリー社会へ完全に同化するか、コ

スモポリタンとか異邦人というレッテルを貼られることをできるだけ避けながらユダヤ人としての自己を貫くか、というきわめて深刻な選択を迫られているのである。

さて、エルシュのユダヤ人アイデンティティー研究 (Erös, 1988) は、ホロコースト後に生れた者 (1945年から1956年の間に生まれた者) に対するインタビュー調査である。インタビューの内容は、三世代にわたる家族の歴史、個人の生活史、ハンガリー社会においてユダヤ人であることをどのように考えているか、という三つから構成されている。そして、結果として次のようなことが明らかになった。ホロコーストで生き残った家族は、ホロコーストの記憶を抑圧したり、隠したりする傾向がある。このような家族では、家族の歴史の世代間伝達がおこなわれない。親は教えないようにしているにもかかわらず、子供がなんらかの理由で自分がユダヤ人であることを知ると、その子供は極度の葛藤とアイデンティティーの危機に陥る。子供の場合、肯定的タイプ (ハンガリー人であることとユダヤ人であることを統合する) と否定的タイプ (他者との違和感を常に感じている) の二つに分かれる。ユダヤ人集団に属するということの基礎は、両親の悩みを共有し、迫害されるかもしれないという恐怖を共有し、運命共同体の中に属するという感情を共有することによって形成される。

かねてより、エルシュは心理学の狭隘化を嘆き、当時のハンガリー心理学の非歴史主義的、実証主義的、自然科学主義的、工学主義的傾向を批判し、心理学と歴史学、社会学、哲学との統合をめざしていたが、以上に紹介したユダヤ人アイデンティティー研究は、彼のそのような問題関心の一端である。

## [ 5 ] 最近の展開 (エルハンモウミ, ロス) から

ここでは、ごく最近、私の目にふれた注目すべき論考として、エルハンモウミとロスのものを取りあげておきたい。

### 5-1 エルハンモウミ

エルハンモウミ (Elhammoumi, 2001, 2002) は、心理学研究においては史的唯物論、とりわけ社会的生産関係が中核に置かれなくてはならないことを強調して、社会・歴史・文化心理学が備えるべき6つの視点を以下のようにまとめている (Elhammoumi, 2001)。

人間の高次心理機能、意識、活動は社会的生産関係の産物である。

人間の高次心理機能、意識、活動は記号と道具により媒介される。

人間の高次心理機能、意識、活動は発達的あるいは発生的分析により検証される。

人間の高次心理機能、意識、活動は歴史の中で構築された人間の活動の中に根源を持つ。

人間は生産のための道具を作り、そこから労働活動が生まれ、さらにそれが社会的生産諸関係を制御する。

人間の高次心理機能、意識、活動は、文化の中で営まれる人間の活動により形成される。

ところが、このような視点に照らすとき、現在のヴィゴツキー研究の弱点は、次の3点である。

道具、記号、言語、言語行為、最近接発達領域などが取り上げられ、社会的生産関係が無視されている。

真の意味でヴィゴツキーを理解しようとするれば、マルクスの『ドイツ・イデオロギー』、『経済学批判要綱』、『資本論』の見解へと立ち返らねばならない。特にアメリカでは、ヴィゴツキーの心理学からマルクス主義的要素を抜き去ることを良しとしてきたという経過があるので、ことさらこのことが重要になってくる。

ヴィゴツキーの心理学において社会的生産関係という概念が誤まって解釈されてきたことが彼の思想をゆがめてきた。

エルハンモウミは、以上のように心理学に史的唯物論の視座を復権させることを主張しているが、その中でもとりわけ社会的生産関係の重要性を強調している。

そこで以下のところでは、富沢賢治（1977）の論文を参考にしながら、生産関係という概念について深めておきたい。

富沢は、まず、『ドイツ・イデオロギー』の中の、「人間の存在とは、彼らの現実的な生活過程である」という一節を出発点に据える。そして、生活過程は活動の過程であると把握する。さらに、活動の中でもとくに生産活動が基本であることを確認する。この生産活動には5種類あり、生活諸手段の生産（衣食住などの生産）、新しい欲求の生産、種の生産、社会関係の生産、意識の生産（言語と意識の生産といってもよい）である。さらに、上記の5種類の生産活動のうち、の生活手段の生産が基軸であると考えられる。したがって、生活諸手段の生産から出発して生活過程の総体を再構築することが人間の全面的把握を可能にするということになる。

これは、一般に活動理論と言うときに、人間の存在を現実的な生活過程、活動として捉えるところまではみんながやっているのであるが、さらに掘り下げて行けば生産活動、さらには生活諸手段の生産にまで行き着くという指摘は心理学においては今まで一顧だにされてこなかった。また、活動＝労働活動とみなして、生産と労働の区別がされていない。富沢が指摘するように、生産と労働は別のものであり、労働はあくまでも生産の主体的契機である。生産は、労働という主体的契機と、生産手段という客体的契機から成り立つものである。

話を元に戻すと、生活諸手段の生産は、その結果として、物質財の分配、交換、消費を規定し、新しい欲求を生み出し、技術、科学、芸術などを生み出し、種の生産を規定し（それはまた、出生数、教育の質と水準、男女関係・親子関係などの社会道徳を規定する）、血縁的・地縁的小集団から国家にいたる種々の社会関係を規定し、言語と意識、思考を生み出す。

以上のような、生活諸手段の生産を基底として展開される史的唯物論について、マルクス・エンゲルスは『ドイツ・イデオロギー』の中で次のように述べる。

花崎訳「この歴史観がよってたつところは、現実的な生産過程を、しかも直接的な生命の物質的な生産から出発して展開し、この生産様式と結びつき、それによって産み出された交通形態、すなわち種々の段階における市民社会を、全歴史の基礎としてつかむところにあり、そして市民社会を、その国家としての作用において解明するとともに、意識のあらゆる多様な理論的諸産物および諸形態、すなわち宗教、哲学、道徳等々を、すべて市民社会から説明し、そしてそれらの発生過程を、それらももつづくそれぞれのところから跡づけるところにある。」（花崎訳、81-82頁）

廣松訳「この歴史観は、かくして次のことに基づく。すなわち、現実的な生産過程を、それも直接的な生の物質的な生産から出発して、展開すること、そしてこの生産様式と連関しておりかつこれによって創出されるところの交通形態を、従って、市民社会を、そのさまざまな段階において、全歴史の基礎として把握し、そしてそれを国家としてのその営為においても叙述すること、また、意識のさまざまな理論的所産と形態のすべてを、つまり、宗教、哲学、道徳、等々を、それから説

明し、そしてこれらのものの生成過程をそれらからあとづけること、そうすれば、当然、そこではまた事象がその全体性において（そしてそれゆえにまた、これらさまざまな側面相互間の相互作用も）叙述されうる。」（廣松訳、48-50頁）

以上のように、富沢の記述を参考にして検討を加えてみれば、これまで心理学で問題にしてきた活動という概念が極めて狭い意味にしか使用されてこなかったことに気づかされるのである。それは、活動を、人間と外部の世界との相互作用、もちろん能動的な相互作用であるが、労働過程としてしか捉えていなかったと思われるのである。人間は、行動主義心理学が考えるような、外部の刺激に対して受動的に反応する、あるいは、内的条件を介して反応するような存在ではなくて、外部世界に対して能動的に働きかける存在である、というふうなのである。いずれにしても、生産という視点が完全に欠けていたと言ふべきであろう。このことが、モハメッド・エルハンモウミが指摘する、従来の文化心理学には史的唯物論の視点が欠けていたということであろう。

## 5-2 ロス

ロスは、レイブ&ウェンガーの正統的周辺参加論（レイブ&ウェンガー、1993）およびエンゲストロームの活動システムの拡張モデル（Engeström,1987）に依拠して、活動に参加するなかでの人格形成の問題を精力的に展開している。

まず、レイブ&ウェンガーの正統的周辺参加論とは何かということを復習しておこう。正統的周辺参加の例としては、レイブがリベリアの仕立屋の徒弟の修業を観察したものがよく引き合いに出される。それは、仕立屋の親方のところに入門した徒弟は、特別に親方から講義を受けるわけでもなく、また教えられもしないのだが、最初は失敗してもいいボタン付けから始めて徐々により難しくより重要な仕事を任されていき、結果的に最終的には親方の技術をすっかりマスターしてしまうというプロセスである。その間、ほとんどの学習が見よう見まねの観察学習であり、とりたてて親方から徒弟への教育というものはほとんどなされない。

簡単にいえば、レイブとウェンガーの正統的周辺参加論は上のようなものであるが、次のような具体例で考えると理解しやすい。たとえば、ある新入社員が大学を卒業してある会社に就職したとする。この新入社員は、はじめはあまり重要でない仕事を任される。その仕事をこなす過程で、上司や先輩や同僚の指導や助言や援助を受けて彼は自分の仕事をこなしていく。たとえば、1年ぐらいいしてその仕事が充分こなせるようになったときに、次にまた別の新しい仕事を与えられる。その仕事をやる過程においても、先ほどの最初の仕事のときと同じように周囲の人々の援助や協力があるはずである。このようにして、この新入社員は、順次、より難しい、そして会社にとってはより重要な役割を与えられ、その会社の社員として順調に成長していくわけである。

以上のように、新入社員が、周辺の仕事からより重要な仕事へと移っていき、しかもその過程で社員として成長していくことを正統的周辺参加というわけである。もし、この社員が、入社したときに与えられるのとはほぼ同じレベルの周辺の仕事ばかり任されて退社の日を迎えるとするならば、その社員にとってはそれは正統的ではなく非正統的周辺参加となるのであり、その社員はいつか自分の能力を伸ばせないばかりか、会社としてもその社員の能力を十分に活用して会社の発展のために役立たせていない。だから、正統的という概念の中には、重要度が次第に増していくいろいろな仕事を順次与えていって、その社員を幹部候補生として成長させていくという意味と、そのことにより組織そのものも自らを維持し発展していくという側面の両方が含まれている。

その点から考えて、レイブとウェンガーの正統的周辺参加という概念は、社員の視点からは学習

し能力を伸ばし、さらに人格的にも成長していく過程であり、同時にそれは組織内において自己のアイデンティティを確立していく過程である。また、組織の視点から言えば、そうすることこそが組織体そのものの自己保持とさらなる発展のために必要不可欠なやり方なのである。

ところが、最近のわが国の雇用状況を見てみると、正規社員をリストラし、非正規社員を増やしていくことが大規模に行われている。そのために、フリーターやニートと言われる若者が急増して社会問題となっている。正統的周辺参加論とはまったく反対のメカニズムによって、これらの非正規雇用者たちは能力も技能も身につかず、そして人間的に成長していく可能性も根こそぎ奪われている。NHKスペシャルで放映されて評判を呼んだ『フリーター漂流：モノ作りの現場から』（2005年2月5日放映）が描く日本社会の現場で進行している絶望的な溶解現象を正統的周辺参加論の視点から批判していくことも必要であろう。また、この最近の状況は、鎌田慧が今から35年ぐらい前に描いたトヨタの自動車工場の様子（鎌田慧『自動車絶望工場：ある季節工の日記』（講談社、1983年））や、あるいは、細井和喜蔵が1925年に描いた女工たちの悲惨な労働・生活条件（細井和喜蔵『女工哀史』岩波書店、1954年）と本質的には変わっていないことに気づくとき、われわれは暗澹たる思いに落ち込むのである。

次にエンゲストローム（Engeström,1987）の活動システムの拡張モデルは、「ヴィゴツキーの三角形」の記号の箇所へ、道具、共同体、規則、分業の四つを新たに組み込んだモデルである。

たとえば、このモデルで、今、主体のところ、ある病院で働く一人の医師を置いてみよう。この医師にとっては、いろいろな病気や悩みを抱えて病院にやってくる患者が客体となる。その患者を、さまざまな道具や蓄積された処方箋などを動員しながら、よりよい方向へと治療していくのがこの医師の仕事になる。また同時に、この医師の仕事は、病院全体の規則、たとえば病院の経営方針であるとか仕事のローテーション等により規制されているし、病院全体の組織としてのあり方とか、看護師や事務職員との仕事上の関係とかによっても規制され、影響されている。その中で、当然のこととして、医師と患者との間、あるいは医師と看護師や事務職員、検査技師との間、さらには医師と病院の経営方針との間などに軋轢、矛盾が生じ、この医師は悩むと同時にそれをエネルギーにして前進することもできるのである。エンゲストロームのモデルはこのような現実の矛盾にさらされている現実の社会に生きる人間を説明することが可能なモデルとなっている。

さて、ロスは、以上の正統的周辺参加論において、活動に参加していくなかで人格の成長が実現されるという点に着目して、そして、エンゲストロームの活動システムの拡張モデルにおいては、各項目間の矛盾が発展の原動力であることに着目して、それを、地域における教員養成プログラムのフィールドワークの中で実証している。

Roth & Tobin(2002)では、教師養成プログラムにおいて、チームティーチングや集団教育、教師と生徒代表から構成される組織作り等の実践を通じて、個人的な学びではなく、社会的・集団的な学びを実現させ、それを通じて教師集団と生徒集団および行政との新たな関係が生じ、そのことにより、より参加的で民主的な関係が出現したことを述べている。

Roth et al.(2004)では、教師養成プログラムへ参加するなかで、それぞれ問題を抱えていた生徒と教師の人格が変容していき、問題行動を引き起こしていた生徒が優秀な生徒へ、一方、クラスを把握できなかった問題教師が皆から尊敬される優秀な教師へと、活動を通じて成長していったケースを報告している。

以上、この間の私の歩みを振り返りつつ、人格に関連したいろいろな試みについて触れてみた。

総じて言えることは、一部の例外（プラデル・ドゥ・ラトゥールとヴァシリユック）を除いて、ほとんどが、史的唯物論的視座からの人格論であると考えてもいいのであるが、すでに、セーブのところで批判が出ていたように、これらの史的唯物論的視座からの人格論は、経済的生産至上主義だとの異議申し立てが行われる余地をたぐんに持っている。史的唯物論の根底をなす生産からはみ出た領域、たとえば、環境問題、女性問題等をどのように人格論に取り込むべきかという議論の可能性については私自身もこれまで不十分にしか取り組んでこなかったのであるが、社会における人間形成というテーマをさらに発展させるためには不可欠の作業でもあるので、以下のところで少し詳しく検討してみたい。

## [ 6 ] 社会的な生活過程：生産から漏れた部分

中野（1977, 1979）は、生産を根底に据える土台 上部構造カテゴリーのきわめて重要な意義を十分に認めつつも、それはあくまでも史的唯物論の骨格を表しているだけのカテゴリーであり、人間の全面的把握を可能とする全体的カテゴリーではないと主張する。それに代わる全体的カテゴリーとして社会的な生活過程というカテゴリーを提出する。この社会的な生活過程という概念は、人間の物質的・観念的な活動の総体を包括する広義の実践概念である。また、社会的な生活過程は、人間と外的自然との間の相互作用の中ばかりではなく、人間と他の人間との相互作用の中にも置かれている。要するに、従来の史的唯物論の基本的カテゴリーである土台 上部構造は、土台として生産諸関係を、上部構造として国家・政治・法律的上部構造を、社会的意識として体系的な意識（たとえば、宗教、道徳、哲学など）を想定しているので、生産を中核とした社会のモデルとしてはふさわしいのであるが、あくまでもそれは抽象的な狭いモデルである。これに対して、社会的な生活過程というカテゴリーは、土台 上部構造概念をもその中に含む史的唯物論の全体性カテゴリーである。

最初の問題提起から20年ばかり経て、中野（1998）は「生活過程」の簡潔な定義を与えている。それによれば、生活過程とは諸個人の極めて多様な生活活動の社会的総体であり、これらの生活諸活動は、外的自然や他の人間と実践的あるいは精神的に不断に交渉しながら営まれている。人間の生活諸活動は、3つの活動から成る。外的対象（物、および人）に意識的・物質的に働きかけ、それを変更する実践的活動、意識の内部で営まれる精神的活動、無意識的生命過程（睡眠など）や日常生活での（半）無意識的生活行動、である。生活過程は人間存在そのものであり、人間の現実的存在の全体を包括する総体性カテゴリーである。諸生活過程のうち、最も基本的な過程が物質的生活過程である。その中でも、労働過程を主軸とする物質的生産過程は、全過程を主導する過程である。社会的な生活過程は、人間が人間に対して働きかけ、相互に作用しあう社会的行為の諸領域である。その中には、男女の性的相互行為、子の養育、老人の介護を含む家族諸関係、その他の人間と人間との相互行為が含まれる。

ところで、中野の生活過程概念を理解するために参考となるのは上野千鶴子のマルクス主義フェミニズムに関する議論（上野, 1990）である。上野は、生産と生産からはみ出した生活過程部分を、市場と市場の範囲外との区別としてとらえている。マルクス主義は、市場の理論であり、市場をはみ出した領域まで覆う理論ではない。このような市場の外部にある領域としては、家族と自然の二つがある。家族から市場へは、労働力を提供し、市場から家族へは労働力としては使いものにならない老人、病人、障害者が排出されてくる。また、自然は市場へ資源とエネルギーを提供し、市場

から自然へは産業廃棄物が排出される。このようにして、家族と自然はともに市場を支えてきた。女は、この家族の中で市場から排出されたものたちを世話する補佐役として、二流市民として扱われ、人間として扱われてこなかった。マルクス主義フェミニズムは、社会領域が市場および家族へと分割されることを問題として捉え、近代社会の女性抑圧のメカニズムを家父長制的資本制と捉え、その物質的基盤が女性に課せられた家事労働という不払い労働であることを見抜いた。よって、マルクス主義フェミニズムは生産を鍵概念とするマルクス主義の改定を要求する挑戦的な試みである。

この上野の議論は、中野の議論と類似するのであるが、中野が社会的生活過程という生産をも包含する全体的カテゴリーを提案しているのに対して、上野は「経済学が、オイコス（オイコノミア）からエコノミーに変容した時に、『経済』概念は『生産』から『生活』を追い出した」（277頁）として、経済＝市場、生活＝市場の外部（家族と自然）として、やはり生活という包括的概念の見直しを主張するのである。

以上のような、社会的生活過程論を視野に入れるとき、すでに紹介しているブラデル・ドゥ・ラトゥールとヴァシリユックの人格論は貴重である。母から娘へ、そして祖母から孫娘へという女系のルートを通じての、しかも、家事と生活を媒介としての地域アイデンティティーの確立というブラデル・ドゥ・ラトゥールの人格論は、史的唯物論的視座からの人格論の隙間を埋めるものである。また、ヴァシリユックの体験という内的活動を通しての人格形成論は、中野の言う社会的生活過程のうちの意識の内部で営まれる精神的活動に焦点を当てたものであり、やはり、従来の史的唯物論的視座の隙間を埋める試みである。

この点では、社会・文化心理学派の対応は遅れていると言わざるを得ない。私の目にした数少ないフェミニズム的視点に言及した社会・文化心理学派の論文である、ヴェラ・ジョン・スタイナーの「社会文化理論とフェミニスト理論：相互性と妥当性」（John-Steiner, 1999）を見ても、フェミニズムが社会文化学派へ貢献できる点は、人間と人間の相互依存関係を重視することの必要性の強調、認知と情動の統合を強調することの二点であるとするのみで、中野や上野が言及しているような視点は見られない。このことも、先の部分で、エルハンモウミが指摘していたように、現在の社会文化学派には史的唯物論的視座が欠けていることの証であるのだろう。そもそも、中野や上野が問題とした問題意識が、史的唯物論的視座を経た上での見解であるからだ。

## [ 7 ] 芝田・南論争に就いて

ここまで、私自身の探求の過程のあらすじを述べてきたわけであるが、冒頭の芝田・南論争の問題提起に帰って、とりあえずの結論を出しておきたい。

芝田・南論争で明らかになったポイントは、心理学は自然科学と社会科学を統合したものであり、その環となるのが人格である、とまとめられる。私はここまでのところで、人格とは社会における人間形成であると読み替えてもいいのではないかと述べてきた。そして、それを社会科学の視点、すなわち、史的唯物論的視座からどこまで解明できるかという点を、主として論じてきた。ところが、自然科学と社会科学との統合としての人間形成という観点に立つと、それは社会科学の視点からの一方的なものであり、片手落ちであり、不十分であるとされても仕方がない。そこで、次に、できるだけ、自然科学と社会科学の統合としての人間形成という視点にふさわしい論点を提出

してみたい。

そのためには、近年、新たな問題提起をしている進化論的認識論の視点を取り入れることが必要になってくると思う。その際、進化論的認識論の研究者ヴケティッツも指摘しているのであるが(ヴケティッツ, 1994), 心理学のなかでは唯一、進化論的認識論の視点を備えたピアジェの心理学を、まず導入することが必要である。それでは、ピアジェの人格論から話を始めたい。

ピアジェは、知能の発達4段階を、感覚運動期、前操作期、具体的操作期、形式的操作期の4段階に分類している。そして、知能と社会的行動(対人行動)はコインの裏表であるとして、知能が形式的操作期の群性体という論理的・体系的な完成形態を目指して発達する過程で、社会的行動の面においても、具体的操作期以降になると、他者と協調して他者の立場に立った行動ができるようになることを主張した。前操作期の段階では、知能の面では自己中心的思考と言われる一面的な思考しかできなかった子どもが、具体的操作期に入ればもう一つ別の側面からも考えることができるようになる。それが、形式的操作期になれば、さらに多面的に、体系的に思考できるようになる。それとともに、社会的行動も、他者の立場を無視した自分中心の行動であったり、逆に、他者に一方的に服従するといったような一面的な行動形態から、相互尊重と協働という行動形態へと発達する。ピアジェは、この段階になって、初めて人格は成立すると考えている(ピアジェ「ゲームの規則」, 出典は Gruber & Vonèche, 1977)。すなわち、ピアジェの言う人格とは、知能の面では脱中心化されていて論理的・多面的に考えることのできる状態であり、対人関係の面では相互尊重と協働のできる状態である。このことから、ピアジェは人格というものを、思考、特に科学的認識と協働的対人関係の統合されたものとしてとらえていることがうかがわれる。すでに見たように、これを鋭く指摘しているのがチャプマンであった。

ところで、以上のようなピアジェの人格・知能・社会的行動をめぐる議論、すなわち、知能が操作を獲得して自己中心的思考を脱却することが、同時に、社会的関係においても、互いに尊重しつつ協働するという人間関係をとり結べるようになり、そして、その段階で人格が成立するという指摘は、鈴木茂(1989)の述べるマルクスの個人の自由な意識的活動と自由な共同体との関係を彷彿とさせるものであり興味深い。鈴木によれば、マルクスの言うところの人間の種としての特質である自由な意識的活動と共同的社会性は一つのものである。ここで、自由な意識的活動とは、人間の内面の自由、自由な思考、自由な反省作用のことであり、共同的社会性とは人間の各々の活動は他の活動を補完するものになり、各々の欲求の充足は他の欲求の充足となり、一方の生命発現が他方の生命発現をつくりだし、一方の享受が他方の享受になるというように、互いの直接的な補完関係のなかでだけ現われるような人間の本質のことであり、さらに言えば、この共同的社会性は、民主主義のことであり、人間が外的な支配なしに生産や分配を共同で組織する自由な民主的社会のことであり、このような自由な人間の共同体においてのみ、人間の自由な意識的活動が可能になるという意味で、二つのものは一つのものなのである。

鈴木は、以上のようなマルクスの言うところの人間の種としての特質は、種のレベルにおいて獲得されているいわば先天的な特質であることを、ロレンツやチョムスキーを引用しながら述べるわけだが、なるほど、そこに至るプロセスの説明においてはピアジェは鈴木やチョムスキーとは異なるにしても、以上のところでピアジェの人格論を見てきたことから推測すると、究極の理想的社会のイメージにおいてはピアジェも彼らと同じ民主主義的社会像をもっていたと考えられる。

さて、鈴木が主張した種としての人間に生得的に備えられている社会性という議論を補強する著書として、ブラザーズの『フライデーの足跡: いかにして社会は人間の心を形成したか』(Brothers,



1997)に触れておきたい。その中で、ブラザーズは人間の脳は進化の産物として、社会的な脳となっており、脳のある部位(大脳辺縁系および扁桃核)がその生得的な社会性を司っていること、そしてその社会性は他者とのコミュニケーションの過程により開発され、人間の心として展開していくことを主張している。

このように、近年の脳科学の進歩や進化論的認識論の台頭により、人間の社会性の進化論的・生物学的根源が明らかにされてくると、本稿で扱った史的唯物論的視座からの人格論に進化論的根拠づけを与えることが可能となり、本稿冒頭で触れた、心理学は自然科学と社会科学の分裂を止揚した一つの科学となるという提言が現実となる展望が開かれてきているのではないか、という思いを強くせざるをえない。そして、そのことは、再度マルクスを引用すれば、「歴史自体が、自然史の、人間への自然の生成の、現実的な部分である。人間に関する科学が自然科学をそのもとに包括するように、自然科学はのちにまた人間に関する科学をそのもとに包括するであろう。すなわち、それは一つの科学となるであろう。」(マルクス『経済学・哲学手稿』)という方向へと着実に歩んでいることを示しているのである。

以上のことから、芝田・南論争を統合する手がかりとしては、今から50年前にはまったく取り上げられることもなかった、ヴェケイツに代表される進化論的認識論の立場がきわめて有効であるように思われる。

## 文献

- アナニエフ(1983)松野豊訳『認識の対象としての人間』明治図書
- バフチン(1973)川端香男里(訳)『フランソワ・ラブレの作品と中世ルネッサンスの民衆文化』、せりか書房
- Brothers,L.(1997)Friday's footprint :how society shapes the human mind. New York:Oxford University Press.
- Chaiklin,S.,Hedegaard,M.& Jensen,U.J.(1999) Activity theory and social practice. Aarhus University Press.
- Chaiklin,S.(2001a) The category of personality in cultural-historical psychology. In S.Chaiklin(ed.) The theory and practice of cultural-historical psychology. Aarhus University Press, 238-259.
- Chaiklin,S.(2001b) The theory and practice of cultural-historical psychology. Aarhus University Press.
- Chapman,M.(1991) The epistemic triangle : Operative and communicative components of cognitive competence. In M.Chandler & M.Chapman (Eds.)Criteria for competence. Lawrence Erlbaum Associates, 209-228.
- Elhammoumi,M.(2001) Lost or merely domesticated? The boom in socio-historicocultural theory emphasizes some concepts, overlooks others. In S.Chaiklin(ed.) The theory and practice of cultural-historical psychology, 200-217.
- Elhammoumi,M.(2002) To create psychology's own capital. Journal for the theory of social behaviour, 32, 89-104.
- El'konin,D.B.(1977) Toward the problem of stages in the mental development of the child. In M.Cole(ed.) Soviet developmental psychology,M.E.Sharpe,538-563.
- Engeström,Y.(1987) Learning by expanding.Helsinki:Orienta-Konsultit Oy.
- Erös,F.(1988) After assimilation - Hungarian Jews today. Jewish Socialist
- Forrai, K. (1988) Music in preschool, Corvina
- Gruber,H.E. & Vonèche,J.J.(1977) The essential Piaget. Routledge & Kegan Paul.

- 廣松渉(1971)『唯物史観の原像』三一書房
- 廣松渉(1990)『今こそマルクスを読み返す』講談社
- 細井和喜蔵(1954)『女工哀史』岩波書店
- 乾孝,高木正孝(1957)『心理学』青木書店
- 乾孝他(1983)『人格心理学』新読書社
- John-Steiner,V.(1999) Sociocultural and feminist theory : mutuality and relevance. In S.Chaiklin, M.Hedegaard & U.J.Jensen (Eds.) Activity theory and social practice. Aarhus University Press, 201-224.
- カリモワ(1987)「ウズベキスタン女性の人格の新しい社会的・心理的質の形成過程」『心理学雑誌』1987年4号 [ロシア語]
- 鎌田慧(1983)『自動車絶望工場:ある季節工の日記』講談社
- Kozulin,A.(1990) Vygotsky's psychology. Harvester Wheatsheaf.
- レイブ・ウェンガー(1993)佐伯胖(訳)『状況に埋め込まれた学習:正統的周辺参加』産業図書
- レナード(1988)茂木俊彦他訳『人格とイデオロギー』大月書店
- レオンチェフ(1980)『活動と意識と人格』西村学・黒田直美(訳),明治図書
- ロギノワ(1978)「人格の発達とその生活の道程」アンツィフェロワ編『心理学における発達の原理』ナウカ,1978年所収,156-172頁 [ロシア語]
- ルリヤ(1976)『認識の史的発達』森岡修一訳,明治図書
- ルリヤ(1980)『ルリヤ現代の心理学(上・下)』天野清(訳),文一総合出版
- マルクス(1966)『ドイツイデオロギー』花崎皋平(訳)『新版ドイツ・イデオロギー』合同出版
- マルクス(1974)『ドイツイデオロギー』廣松渉(編訳)『新編集版ドイツ・イデオロギー』河出書房新社
- 南博(1956)「社会心理学の性格と課題」『思想』1956年4月号
- 南博(1963)『社会心理学の性格と課題』勁草書房
- 南博(1976)『行動理論史』岩波書店
- 南博(1980)『人間行動学』岩波書店
- 南博(2001~2004)『南博セレクション全7巻』勁草書房
- 中野徹三(1977)上部構造論の再構成,講座『史的唯物論と現代 2』青木書店,所収,241-278頁。
- 中野徹三(1979)マルクス主義の現代的探求,青木書店
- 中野徹三(1998)「生活過程」『マルクス・カテゴリー事典』青木書店,所収
- 大林太良(1984)「口承文芸と民俗芸能」『日本民俗文化大系7』小学館,所収
- 大久保忠利(1980)「覚え書・スターリン言語観とソビエト言語心理学」,『現代と思想』39号,189-209頁。
- 大久保忠利(1981)『全面発達の国語教育』一光社
- パタキ(1986)「認識構造としてのアイデンティティ・モデル」Studia Psychologica, 23,3/4, [ロシア語]
- パタキ(1987)「逸脱行動のいくつかの問題」『心理学雑誌』1987年4号 [ロシア語]
- Petrovsky,A.V.& Yaroshevsky,M.G.(1987) A concise psychological dictionary, Progress Publishers.
- Pradelles de Latour,M.-L.(1987) Le sens de la famille. Enfance,40,55-68.
- Pradelles de Latour,M.-L.(1990) De grand-mère en petite-fille. La Pensée,276,105-114.
- Roth,W-M.& Tobin,K.(2002) Redesigning an urban teacher education program :an activity theory perspective, Mind,Culture and Activity, 9,108-131.
- Roth,W.M.et al.(2004) Re/Making identities in the praxis of urban schooling: a cultural historical perspective. Mind,Culture and Activity, 11,48-69.
- ルビンシュテイン(1986)秋元春朝他訳『一般心理学の基礎』第4巻,明治図書
- セーブ(1978)大津真作訳『マルクス主義と人格の理論』法政大学出版局

芝田進午（1961）『人間性と人格の理論』青木書店

鈴木茂（1989）『理性と人間』文理閣

高取憲一郎（2005 a）「物質・意識・表象」地域学論集，1巻，25-39頁。

高取憲一郎（2005 b）「活動・生産関係・社会的な生活過程をめぐる諸問題」Blätter für Theorie der Tätigkeit, 15, 1-8.

Tobach, E. (1999) Evolution, genetics and psychology: the crisis in psychology. Vygotsky, Luria and Leontiev revisited. In S. Chaiklin, M. Hedegaard & U. J. Jensen (Eds.) Activity theory and social practice. Aarhus University Press, 136-160.

富沢賢治（1977）生産の総体的把握，講座『史的唯物論と現代 2』青木書店，所収，127-165頁

Tulviste, P. (1999) Activity as an explanatory principle in cultural psychology. In S. Chaiklin, M. Hedegaard & U. J. Jensen (Eds.) Activity theory and social practice. 66-78.

上野千鶴子（1990）家父長制と資本制，岩波書店

Vasilyuk, F. (1991) The psychology of experiencing. Harvester Wheatsheaf.

Wertsch, J. V. & Tulviste, P. (1996) L. S. Vygotsky and contemporary developmental psychology. In H. Daniels (ed.) An introduction to Vygotsky. Routledge, 53-74.

グケティツ（1994）入江重吉（訳）『進化と知識：生物進化と文化的進化』法政出版

山口昌男（1990）『知の遠近法』岩波書店

柳田国男（1983）「日本の家と教育」長浜功編『柳田国男教育論集』新泉社，所収

(2005年10月17日受理)